

キャリアデザインセンターPBL活動中

学生が主体的に社会的課題の解決に挑戦するPBL(Project Based Learning)課題解決型学習。本学キャリアデザインセンターは、専修リーダーシップ開発プログラム、課題解決型インターンシップ、専大ベンチャービジネスプログラムの三つのPBLプログラムを展開している。それぞれ5月から今年度の活動が始まり、参加学生が意欲的に課題に向き合っている。活動の一端を紹介しよう。

リーダーシップ開発プログラム

企業と協働 社会で活躍

リーダーシップ開発プログラムは、2013年度から始まり、5期目の今年度は全学部から29人が受講している。毎週の連続2コマの講義と、企業と協働したテーマ活動が活動の柱。講義では学内外から講師を招き、グループワークを中心に学んでいる。チームを組んで取り組むテーマ活動では5社と協力を。このうち富士ゼロックス(本社・東京都港区)の社会貢献活動には5人が参加している。同社は今年、神奈川県南足柄市とともに「南足柄市ととも」に「南足柄市が活動の柱」を掲げた。このなかでリーダーシップ開発プログラムの挑戦しているのが「インクルーシブ教育」と「防災」だ。インクルーシブ教育は、障がいにかかわらずだれもが同じ教室で学ぶこと。二つを組み合わせて何かできないか、学生に提案した」と同社復興推進室の山田敏哉さん。学生たちがひねり出したのが「防災すごろく」。遊びを使って避難所の疑似体験をするというアイデアだ。



活動計画を報告する学生たち=8月8日、横浜市の富士ゼロックス

8月上旬、横浜市の同社オフィスで打ち合わせが行われた。緊張気味の学生たちに、山田さんが進捗状況を質問する。口調は優しいが核心を突いた問いに、言葉を詰まらせる場面も少なくない。打ち合わせの中盤、山田さんが防災対応ゲームを紹介した。災害発生時の行動について、「イエス/ノー」を選択し、理由を説明する。実際に何問かやってみることに。真剣に悩みながらも、ゲームが進むうちに、くつろいだ雰囲気になっていった。こんなゲームもありますからね。すごろくを作るイメージが湧きましたか?との山田さんの一言に、学生はハッとした表情を見せた。

本プログラムで追求するリーダーシップとは周囲を強引に引っ張る力ではない。「多様な他者を理解し目的を実現するために他者と協働していく能力」と定義する。多面的な見方を示し、次の行動を示唆する山田さんの姿勢に学生たちは自分たちの求めるリーダーシップを感じていた。



講義では多様性を生かすなどについて学んだ=6月29日、生田キャンパス

松丸明日香さん(文1)は「大学で何かしたい」と思い本プログラムを受講した。いろいろな考えを知ることができて刺激になる。活動を通じて成長したい」と瞳を輝かせる。今後南足柄市の関係者らと意見を交わしていき、成果を形にすべく奮闘を続ける。ベンチャービジネスプログラムは、起業家精神を養成することを目的にしている。前期にスタートイベントと、ビジネスプランの作り方を基礎から学べる講座を開催した。また、今年度初めて、ブラッシュアッププログラムを実施。学生が思いついたアイデアに対して、専大卒の経営者らが個別に指導した。プログラムの到達点であるベンチャービジネスコンテストは、書類審査とプレゼンテーション大会で構成する。最優秀賞は賞金30万円。応募は個人、団体問わず、前期の講座を受講していなくてもかまわない。ビジネスプランの応募締め切りは10月17日(火)。

ベンチャービジネスプログラム OB経営者らの指導も



初開催のスタートイベントでは、昨年の最優秀賞受賞者の講演があった=5月19日、生田キャンパス

経営学部ゼミナール連合会が、学部を紹介する映像を制作し、本学ホームページで公開している。高校生をターゲットに、学生目線で経営学部の魅力を紹介します。制作にあたっては3年次生は「経営学部の学びの面白さを知ってもらいたい」と話している。ゼミ連は経営学部のゼミナールの交流を目的とした学生主体の組織で、30余りのゼミで作る。毎年、合同研究報告会や卒業論文発表会などを開き、ゼミの枠を超え、知識を深めている。経営学部の学びについて学生目線で高校生に訴えたいという小沢一郎(ゼミ)のアイデアで、学

映像で学部の魅力紹介

経営ゼミ連合会が制作

教授が執行部に制作を依頼した。手を上げたのは栗原一輝さん(小沢ゼミ)ら8人。4月から取り掛かった。「身近なところに経営学部の学びがあるということを高生に伝えたい」と話すのは橋口萌花さん(笠原伸一郎ゼミ)。高生生のときにコンビエンスストアをテーマにした模擬授業で経営学に興味を覚えたという小沢一郎(小沢ゼミ)のアイデアで、学部の魅力を伝える映像を制作した。映像を制作した経営学部ゼミナール連合会のメンバー

課題解決型インターンシップ

長期間、地域に密着

課題解決型インターンシップは、地域の企業や団体が抱える課題に対して解決策を提案する本学の独自の長期インターンシップで、今年度は23プロジェクトが展開している。7月22日には生田キャンパス近くで民家園通り商店会夏まつりが開催された。課題解決型インターンシップのメンバーはこども広場を任された。初めての取り組みとして水遊びを企画。お面とマントを着けた学生をやっ



学生がお化けにふんし子どもと水をかけ合った=7月22日、川崎市多摩区

食べたいカップ麺提案 高校生の経営学実践講座



「高校生のための経営学実践講座」が8月6日、生田キャンパスで開催された。12回目となる今回は、日清食品の協力を得て「高校生が食べたくなる食べたいカップ麺」を考えた。最後には寸劇を交えたプレゼンテーションを行った。専大OBで日清食品HD相談役の中川晋氏(昭44経済)、看板商品「カップヌードル」などのブランドマネージャーを務める部長の藤野誠氏(平4経営)も参加。実際の経営現場で体験したアイデア提案に取り組み、経営学部の学びに触れた。高校生たちは6グループに分かれ、「インスタグラム(写真に特化したSNS)映えるパッケージ」や「食べたい味」を考えた。最後には寸劇を交えたプレゼンテーションを行った。

「友達とシェアして食べたい」というのは私たちに合った着眼点。二つの味を混ぜて新しい味を作ろうとするアイデアも面白い」と講評した。「スープは飲み切れず、残してしまう」という意見があったグループは、発想を切り替えてスープ無しのカップ麺を提案し、専大賞1位に選ばれた。高校3年生の男子は「グループは学年もバラバラで最初は戸惑ったが、チャーターの大学生のおかげで、お互いにアイデアを出し合い、楽しく活動できた」と話した。

の子どもと学生の笑顔がはじけた。リーダーの五十嵐純希さん(経済3)は「一から企画を考え、やり抜くことの難しさを知った。地元の方々から楽しんでくれてよかった」と充実した表情を見せる。



映像を制作した経営学部ゼミナール連合会のメンバー



経営学部生の日常を描いたという動画の一場面。そのほかのメンバーは、杉山美穂さん(笠原ゼミ)、渡辺和花さん(福原ゼミ)、横尾昇平さん(山田耕嗣ゼミ)、新井田花音さん(同)。